豆と炭とわら

岩手県

むかし。

おばあさんが、台所の流しで、豆をざくざく洗っていました。すると、豆が一粒ころころころげて、いろりのそばに落ちました。

いろりのそばには、炭とわらがいました。炭とわらは、豆にいいました。

「やあやあ。ちょうどお天気もいいし、上方参りに行かないか」

「そりゃ、いいな」

三人は、上方参りに出かけました。

どんどん、どんどん行くと、川の岸に着きました。川には橋がありません。どうしようかと思案するうち、わらが、

「いいことがある。おれが、橋になってやる」といいました。

わらは、こっちの岸からあっちの岸に横になって、

「さあ、渡れ」といいました。

「それじゃあ」と、炭が先にわたりました。すると、炭には火がまだ残っていたので、とちゅうまで渡ると、わらに火がうつって燃え始めました。炭もわらも川に落ちて、じゅう、じゅうと流れてしまいました。

豆は、それを見て、おかしがって、あはは、あははと笑いました。あんまり笑ったので、口が裂けてしまいました。今度は痛くて、豆は、えんえん泣きました。

そこへ、お針子娘が通りかかりました。娘は、

「どうして泣いているの」とききました。けれども、豆は、痛くて口がきけません。あんあん泣いていると、娘は、

「かわいそうにな」といって、糸で豆の口をぬってやりました。あんまりあわてたもので、口を黒い糸でぬってしまいました。

それからは、豆の口には、黒い糸のあとがついているのだそうです。

どっとはらい

村上郁再話

資料『すねこ・たんぱこ』平野直／有光社